

日本語学習者用速読教材の開発
Development of Speed Reading Materials for Learners of Japanese Language

田畑サンドーム光恵、マッセイ大学

渡部倫子、広島大学

坂野永理、岡山大学

Mitsue Tabata-Sandom, Massey University

Tomoko Watanabe, Hiroshima University

Eri Banno, Okayama University

1. はじめに

本研究の目的は、日本語学習者の読みの流暢さを伸ばすための速読教材を開発することである。読みの流暢さとは、苦も無く正確に、内容理解も伴いつつ、適切な区切り位置を把握して速く読める能力を指しており、その育成には長期の学習を必要とする (Grabe, 2009)。第二言語教育において読みの流暢さは、読解力と読むことへのモチベーションを高めるという点で重要な要素とみなされている。

この流暢さの育成には、繰り返し読み、多読と並んで、速読に効果があることが実証研究により明らかになっている (Chung & Nation, 2006; Macalister, 2008, 2010; Tran, 2011, 2012)。Nation (2009) は、流暢さの育成のためには易しい速読教材 (未知語がなく、文法も難しくない読み物) を使用するべきであると主張している。また、Quinn, Nation, and Millett (2007) で開発された速読教材には、流暢さには速さだけではなく内容理解も伴うべきだという考えから、読み物の後に内容理解問題がつけられている。英語教育の分野では、このような条件を満たした速読教材が多数開発されている。一方、日本語教育の分野では、速読と題した教材がいくつか出版されており、実践報告も複数ある (石橋, 2009; 今村, 2014; 江田, 2002; 川口, 1991; 和氣, 2002 等) が、生教材や既存の教科書を使用している場合が多く、Nation や Quinn らが主張する流暢さの育成の要件を満たした速読教材は未だ開発されていない。

本稿では、こうした現状を踏まえて開発された日本語学習者用の速読教材の特徴、開発の流れと開発時の検討事項、そして速読教材を用いた実践を紹介する。

2. 教材の特徴

本研究では、Quinn, Nation, and Millett (2007) の英語学習者のための速読教材をモデルとして、流暢さの育成を目的とした日本語学習者用の速読教材を開発した。教材は、初級修了、中級、上級の三つのレベルからなり、各レベルで複数の読み物を作成した。読み物の一覧は表 1 に示す。一つの読み物には、その前に使用方法の説明をつけ、読み物の後には、内容にも注意を払って読ませるために内容理解問題をつけた。

表1 速読教材一覧

| 初級修了レベル | | 中級レベル | | 上級レベル | |
|---------|-----------------|-------|---------------|-------|---------------|
| 1 | 目が悪い人のために* | 1 | 牛になった娘** | 1 | 日本のパイオニア女性教育者 |
| 2 | 健康で長く生きるためには* | 2 | マザーテレサ | 2 | 古いものを守る |
| 3 | アメリカに行った初めての留学生 | 3 | 奇跡の人 | 3 | 漆塗り |
| 4 | アメリカンサモア | 4 | オウム真理教 | 4 | 月夜の女王** |
| 5 | ダイエット | 5 | 閑谷学校 | 5 | ゼルダの旅 |
| 6 | ニュージーランドの鳥 | 6 | どのチョコレートがほしい？ | 6 | アイヌ民族 |
| 7 | バービー人形とリカちゃん | 7 | タイタニック | 7 | コンビニ |
| 8 | ハローキティ | 8 | 昔の貴族の生活 | 8 | マルクスと鏡 |
| 9 | ハワイに行った日本人 | 9 | 日本の始まり** | 9 | 広島カープ |
| 10 | 寝る時間 | 10 | 母の日、父の日、子どもの日 | 10 | 寿司 |
| 11 | 赤いろうそくと人魚** | 11 | 大原美術館 | 11 | ジブチへの支援 |
| 12 | 日本の習慣 | 12 | 食べてすぐ寝ると牛になる | 12 | 犬の王様** |
| 13 | 9枚のお皿** | 13 | 毎晩店に来る女** | 13 | アインシュタイン |
| 14 | 虫と赤い葉** | 14 | 不思議な光るもの** | 14 | 良い名前** |
| | | 15 | 犬が寒がらない理由** | 15 | 藤井風 |
| | | 16 | アフガニスタンのために | 16 | 不思議な果物** |

*練習用

**昔話や神話などのフィクション（それ以外はノンフィクション）

本教材の同じレベルの各読み物は、長さ、使用する語彙と文法が同じ基準で書かれている。これにより、同じレベルの読み物の難易度が同等となり、異なった読み物を読んでも読む速度が比較できる。それぞれのレベルの基準は表2に示す。

表2 各レベルの基準

| レベル | 語数 | 文法 | 長さ |
|------|---------|--------------|-----------|
| 初級修了 | 1,285 語 | 旧 JLPT 3・4 級 | 390-410 語 |
| 中級 | 4,000 語 | 旧 JLPT 2~4 級 | 440-460 語 |
| 上級 | 6,000 語 | 旧 JLPT 2~4 級 | 490-510 語 |

学習者はこれらの教材を使うことにより、内容に注意を払いつつ、速く読む練習を行うことができる。すなわち、流暢さの向上（内容理解を維持したままの速度の伸び）が測定できることとなる。

3. 開発の流れと検討事項

速読教材の開発は以下の流れで進められ、それぞれについて検討を行った。

3.1 使用方法の説明の作成

速読教材を使う前に学習者がその使用方法を理解することが必要だと考え (Nation & Waring, 2020; Tabata-Sandom, 2017)、最初のページに使用方法の説明を入れた。説明は日本語での理解が難しい学習者のために、日本語のほかに英語、中国語でも記載した。使用方法には、以下4つの説明を入れた。

- (1) 読み物をなるべく速く黙読する。
- (2) メモはとらずに内容にも注意を払って読む。
- (3) 教師の合図で読み始め、読んだ後にスクリーンなどに映し出されたストップウォッチを見て、読むのにかかった時間をメモする。
- (4) 読んだ後、次のページの内容理解問題に答える。答える時は、読み物を見ない。

3.2 読み物の作成

読み物については、以下の7点を考慮して作成した。

(1) 長さ(語数)

読み物の長さは、Millett (n.d.)の英語速読教材の実施時間を参考にして、1つの読み教材の実施時間が10分以下となるようにした。それぞれのレベルの読み物の語数は表2を参照のこと。

(2) 語彙

それぞれのレベルで既知語と想定される語彙を決め、その語彙を使った読み物を作成した。初級修了レベルは、旧 JLPT3、4級の語彙1285語が既知語と想定した。中級、上級は、菅長・松下(2013)の語彙リストを使い、中級レベルでは4000語の語彙、上級レベルでは6000語の語彙を既知語と考えた。Nation (2009)は速読教材の読み物は全て既知語であるべきとしているが、特に初級修了レベルにおいては、100%既知語とするのは難しいため、95%以上がリスト内の語彙であることとした。

(3) 文法・文章の構造

初級修了レベルは旧 JLPT3、4級の文法、中級、上級は旧 JLPT2~4級の文法を知っていると考え、それ以外の文法は使わないこととした。また、認知的な負荷に配慮し、一文の平均語数が多くならないようにし、文章の結束性、一貫性に注意した。

(4) ジャンル

速読に不向きな学術的、専門的、抽象的なものは避けた。また、ノンフィクションだけでなく、フィクションも作成した。

(5) 情報量と構成

記憶の処理に過度の負担をかけないように、数字など細かい情報を入れすぎない、多くのエピソードを羅列するのではなく興味深いエピソードに絞る、途中で回想シーンを入れず時系列に並べることなどに注意した。

(6) 内容に関する既存知識

既存知識により読まなくても内容がわかる場合があるため、なるべく既存知識の影響が出ない題材を選んだ。

(7) 漢字・挿絵

文章理解に影響を与えないように、漢字にはすべて振り仮名をつけ、挿絵は挿入しないことにした。

3.3 内容理解問題の作成

読み物に付随する4肢選択式の内容理解問題10~13問を作成した。内容理解問題は細かい事案の記憶を問うような問題ではなく、大まかな内容を問う問題を、読み物の内容と同じ順番で提示した。語彙と文法については、読み物と同じ基準で作成した(3.2参照)。

3.4 内容・難易度の確認

作成した読み物及び内容理解問題の語彙がリスト内の語彙かどうかは、菅長・松下(2013)のJ-LEXを使用して行った。また、文法項目の確認は、学習項目解析システム(筑波大学留学生センター, 2012)によって行った。

やさいちチェッカー(やさしい日本語科研グループ, 2012)を使用し、同じレベルの読み物の難易度が同じかどうかを確認した。その結果、同じレベルの異なった読み物の難易度が同程度であることが裏付けられた。



図1 「日本の習慣—お返しとお土産」のやさいちチェッカーによる分析結果

その後、複数の日本語教師に各教材を試用してもらい、問題点として挙げられた点を修正した。これに加え、日本国内の複数の大学の日本語学習者にも試用し、難易度の確認及び内容理解問題の精査を行った(渡部・坂野・田畑サンドーム, 2017)。

4. 速読教材を用いた実践

作成した速読教材は、日本国内の大学のクラスで使用した。このうち、ある大学の多読クラスの一環として、中級レベルの教材を使用した研究が報告されている (Tabata-Sandom, Banno, & Watanabe, 2023)。このクラスでは、16週間の間に10回の速読練習を行い、学期開始時と終了時の学習者の読む速度の変化について調査を行った。その結果、参加者の速度が有意に速くなったことが明らかになった。このことから、開発された速読教材が読む速度の上昇を促し、かつ上昇値の測定ツールとして機能することが示唆された。

5. おわりに

本研究では、日本語学習者用の速読教材の特徴、開発の流れと開発時の検討事項、速読教材を用いた実践について報告した。開発された教材の一部は、現在、オンライン上で試用版が公開されているが (<http://160.16.227.183/kouka/>)、今後は電子書籍化の可能性も含めて、日本語学習者用の速読教材の一層の開発を進めていきたい。

参考文献

- 石橋玲子 (2009) 「タイ人日本語学習者の言語学習ストラテジー使用—速読スキルを導入した場合—」 『アジアにおける日本語教育「外国語としての日本語」 修士課程設立一周年セミナー論文集』 73–88.
- 今村和宏 (2014) 「能動的読みへの気づきと意識化に重点を置いた速読学習—読みの速度と深さを同時に向上させる条件—」 『日本語／日本語教育研究』 第5号, 217–235.
- 江田すみれ (2002) 「文庫本を利用した速読の授業」 水谷修・李徳奉編『総合的日本語教育を求めて』 国書刊行会, 303–317.
- 川口義一 (1991) 「中級クラスの速読指導」 『講座日本語教育』 第26号, 1–19.
- 菅長陽一・松下達彦 (2013) 『日本語テキスト語彙分析器 J-LEX』 <http://www.17408ui.sakura.ne.jp/index.html> (2023年8月3日)
- 筑波大学留学生センター (2012) 『学習項目解析システム』 <https://lias.cegloc.tsukuba.ac.jp/checker/> (2023年8月3日)
- やさしい日本語科研グループ (2012) 『やさしにちチェッカー』 <http://www.4414uj.sakura.ne.jp/Yasanichi1/nsindan/> (2023年8月3日)
- 和氣圭子 (2002) 「中上級クラスにおける速読練習と読解ストラテジーへの影響—学習者へのアンケート調査から—」 『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 第17号, 127–138.
- 渡部倫子・坂野永理・田畑サンドーム光恵 (2017) 「読みの流暢さ測定ツールの開発—初級修了レベルの日本語テキストと内容理解問題の検討—」 『ヨーロッパ日本語教育』 22, ヨーロッパ日本語教師会, 483–490. <https://www.eaje.eu/media/0/myfiles/lisbon/full.pdf> (2023年8月3日).

- Chung, M., & Nation, I. S. P. (2006). The effect of a speed reading course. *English Teaching*, 61, 181–204.
- Grabe, W. (2009). *Reading in a second language: Moving from theory to practice*. Cambridge University Press.
- Macalister, J. (2008). The effect of a speed reading course in an English as a second language environment. *TESOLANZ Journal*, 16, 23–32.
- Macalister, J. (2010). Speed reading courses and their effect on reading authentic texts: A preliminary investigation. *Reading in a Foreign Language*, 22(1), 104–116.
- Millett, S. (n.d.) *Speed reading and listening fluency*. <https://www.wgtn.ac.nz/lals/resources/paul-nations-resources/speed-reading-and-listening-fluency> (2023.7.12).
- Nation, I. S. P. (2009). *Teaching ESL/EFL reading and writing*. Routledge.
- Nation, I. S. P., & Waring, R. (2020). *Teaching extensive reading in another language*. Routledge.
- Quinn, E., Nation, I. S. P., & Millett, S. (2007). *Asian and Pacific speed readings for ESL learners: Twenty passages written at the one thousand word level*. https://www.wgtn.ac.nz/__data/assets/pdf_file/0007/1068064/asian-and-pacific-speed-readings-for-esl-learners.pdf (2023.8.3).
- Tabata-Sandom, M. (2017). L2 Japanese learners' responses to translation, speed reading, and 'pleasure reading' as a form of extensive reading. *Reading in a Foreign Language* 29(1), 113–132.
- Tabata-Sandom, M., Banno, E., & Watanabe, T. (2023). The integrated effects of extensive reading and speed reading on L2 Japanese learners' reading fluency. *Journal of Extensive Reading*, 10(1), 1–24. <https://jaltpublications.org/content/index.php/jer/issue/view/1206> (2023.8.3).
- Tran, Y. T. N. (2011). EFL reading fluency development and its effects [PhD thesis]. Victoria University of Wellington.
- Tran, Y. T. N. (2012). The effects of a speed reading course and speed transfer to other types of texts. *RELC Journal*, 43(1), 23–37.